

## 巻頭言

長田 俊樹

早いものです。『地球研言語記述論集』も第三号を迎えます。この論集は総合地球環境学研究所（地球研）のインダス・プロジェクトが刊行してきました。そのプロジェクトもあと一年を残すことになりました。したがって、あと一号で終刊となります。しかし、言語記述の火は決して消えることはない。そう願ってやみません。

前号で、最新理論追跡症候群について書きました。言語学徒が競って最新理論を追いかけたことを揶揄して名付けたものです。これと対になるのが、研究の積み残し現象です。じつは、理論を追いかけていくのは、ある程度記述がすすんでいる言語では致し方ない面があります。とくに、英語などについては、新しい理論がこれまでとは違った記述を生み出すといったことがあるでしょう。そのことは認めなければならないと思います。しかし、あまり記述されていない言語についていえば、理論ばかり追いかけてしまうと、網羅的な記述がむずかしくなってしまう。そういう側面があることを知っておく必要があります。そのことはすでに前号で指摘しました。

今回は少し別の角度からの話です。それは言語の研究は対象とする言語によってすすみ具合がちがうことを指摘したいのです。つまり、比較言語学が全盛だった頃、その対象となった言語はおもに印欧語でした。印欧語以外の言語については、比較言語学研究がおこなわれたものもありますが、比較言語学以前の記述すらできていない言語も多数ありました。そうした言語のなかには、今日でもまだ十分に言語研究がすすんでいないものもあります。わたしがここでいいたいことはかんたんなことです。記述言語学や比較言語学は言語学のいわば基礎研究のようなもので、どんな言語においてもそういった研究は、なされるべきだということです。つまり、まだ比較言語学研究がすすんでいない言語については、比較言語学研究をすすめるべきだし、記述ができていない言語については記述をすすめるべきだということです。しかし、現実とはいうと、そうシンプルではありません。言語学のトレンドにどうしても左右されがちです。比較言語学研究自体が下火になってしまうと、その言語について比較言語学的研究がまったく進展していないのにもかかわらず、なんとなく比較言語学研究を避けてしまいがちです。そのことによって生じるのが、研究の積み残し現象というわけです。

具体的な例をあげておきましょう。わたしはムンダ語というマイナーな言語の研究をしています。ムンダ語はモン・クメール諸語とオーストロアジア語族を形成しています。しかし、比較言語学研究がしっかりとおこなわれているわけではありません。つまり、オーストロアジア語族にかんしていえば、まだ比較言語学研究が積み残されているのです。この地球研にきて発表してくださったディフロースさんはオーストロアジア語族の比較言語学研究を続けておられ

ますが、こうした研究に対するまなざしはけっして温かいものとは言えません。やはりオーストロアジア語族比較言語辞典が刊行される日まで、オーストロアジア語族の比較言語学研究は継続されるべきでしょう。

積み残された研究分野ということでは、最近では消滅の危機に瀕した言語として、あまり研究されてこなかった言語、それ自体が再び脚光を浴びるようになりました。積み残された言語を記述する。そのスローガンは魅力的ですが、これがなかなか大変です。わたしも、大西さんもオーストラリアでの言語研究に強く影響を受けています。オーストラリアでは、言語記述の三点セットということがよく言われます。それは文法書、辞書、テキスト書の三つです。辞書やテキスト書はなかなか時間がかかり、ある程度の研究蓄積がなければ作成できませんが、文法書とこの二つをあげているのがさすがオーストラリアと感心します。文法だけではなく、辞書やテキスト書がなければ積み残しだとみなす。そういう立場があることも知っておかなければなりません。

オーストラリアにおいて、文法書とはある特定の理論的枠組みに基づいたものではありません。アメリカ構造主義が打ち出した、いわば記述主義というべき方法に則った網羅的な記述が要請されているように思います。とはいえ、もっとも悩ましいのは統語論です。Actor, Undergoerを使用するのか、ディクソンのようにA（他動詞構文の主語）S（自動詞構文の主語）O（他動詞構文の目的語）を使用するのか、そこにはどうしてもセクト的なおいがして、なかなか難しい問題があります。ここでもただ、そうした用語が一人歩きしないように、それぞれの用語に対して、自分なりの定義を示しておくのが誤解を最小限に防ぐためには重要ではないでしょうか。積み残しが出来ないための文法書はどうあるべきか。真剣に考えるべき課題のように思いますが、皆さんはいかがお考えでしょうか。

記述がすすんでいない言語では、いわばすべてが積み残された状態です。そんな言語の記述では、これまで知られている言語記述の枠組みではどうしようもないケースも出てくるかもしれません。こうした珍しいケースに出会うことは言語記述を志す人にとっては、そこで壁にぶつかって記述をあきらめるのではなく、それを千載一遇のビッグチャンスとして自分なりの記述をこころみることが大切です。こうした記述ができてはじめて、言語記述の醍醐味を知ることになり、新たな言語記述の道が開けてきます。そういった道を切り開くことが積み残しのない言語研究を導くような気がします。

言語記述と一概にいても、いろんな問題点があります。理論に目が奪われると、記述がおろそかになってしまい、積み残されていく課題も山積したままです。かといって、記述の枠組みとしての理論がないと言語を記述することもできません。こうした様々な問題を解決するための第一歩を、言語記述研究会とこの言語記述論集がお手伝いできれば望外なる喜びです。